

# タウラーの神秘主義における *grunt* 概念の分析(1)

— Vetter 版第 1～15 説教に基づいて —

*Analyse vom ‚grunt‘-Begriff in Taulers Mystik (1)*

— Die 1. bis 15. Predigten der Veters Ausgabe —

橋本 裕明 *HASHIMOTO Hiroaki*

(デザイン領域)

## はじめに

教皇ヨハネス二十二世がドミニコ会の神学者エックハルトに対して、教皇勅書「主の畑にて」(In argo dominico)を出して、その教説を異端および異端嫌疑ありとして断罪した<sup>1)</sup>のは、1329年のことであった。エックハルトはその前年、教皇からアヴィニオンに召喚されている間に死去していたので、処断の事実は——予想はしていたとしても——知る由もなかった。この勅書は、エックハルトの件で上訴していたケルン大司教ハインリヒ・フォン・ヴィルネベルクと、この神秘家が役務者として活躍していたケルンのドミニコ会など小範囲にのみ知らされ、以後、後者においては、エックハルトの教説について表面的に沈黙を守ることになった<sup>2)</sup>。

しかし彼の教説に深い感銘を受け、その影響のもとに自らの神秘主義的司牧を展開せんとしていた二人のドミニコ会司祭は、同修道会の公式的立場とは別の道をとった。ゾイゼとタウラーである。彼らは結論的には、ドミニコ会内の同調圧力に屈せず、著作や説教活動の中で、エックハルトの神秘思想がその本質において正統信仰に違背しないことをはっきりと示そうとし<sup>3)</sup>、彼らの「思想上の師」を弁護した。そのためにゾイゼは1326/27年に『真理の書』(Daz buechli der warheit)を著した。ところが1330年にマーストリヒトで開催されたドミニコ会総会議において、エックハルト弁護のかどで読師 (Iesemeister)

1) この3月27日の勅書の中で、エックハルトの28命題は謬説または異端の疑念ありと公式に宣言された。この断罪をカトリック教会は今も公式には撤回していない。ただし教皇ヨハネ・パウロ二世が事実上この神学者の教説を容認してから状況は変化してきている。G. シュティエアによれば、前教皇ベネディクト十六世も枢機卿であり教理省の長官であった1993年に、エックハルトを「現代の世界規模の神秘主義の主唱者」として積極的に紹介した。ドミニコ会でも彼の異端視の撤回に向けた運動が行われている。また1980年に英国のドミニコ会管区は総会に対して、教理省がエックハルトの正統信仰性を認め、同勅書でなされた教説の断罪を撤回するように働きかけて欲しいと依頼した。結果的に、ドミニコ会総長の T. ラトクリフは1992年8月にエックハルト協会会長の T. ウイルコックス宛の書簡で、エックハルトが「善良で正統信仰に立つ神学者」だと認めた。シュティエアはこれによって、エックハルトはゾイゼとタウラー共々、未来を志向する存在となったと結んでいる。Georg Steer, Die literarische Abhängigkeit Johannes Taulers von Meister Eckhart und das Problem der Orthodoxie, in *Heinrich-Seuse-Jahrbuch, Band 4/2011*, Berlin 2011, S.77f. 参照。

2) これが表面的であったのは、エックハルトを支持するドミニコ会士らが存在していたからである。

3) ただし両者ともに、エックハルトに特徴的な「汎神論的」(pantheistisch)な言述は避けた。

の職（Lektorat）を解かれ、その学問的経歴は早くも終わりを告げた<sup>4)</sup>。けれども、師の正統信仰については疑うことなく、自らのミネ文学的著作の中で師の神秘思想を継承していった。

タウラーの場合はゾイゼのような学者のキャリアはなく、説教家としての活動に生涯を費やした。彼もエックハルトの神秘主義の真正性を確信し、その根本思想をもちろん自らの司牧体験から独自に解釈して聴衆に説いたといえるであろう。G・シュティアーはその行動を、「タウラーは自分の説教共同体に神秘的合一（unio mystica = deification）における人間の神化の教えを語ることに怯まなかった」<sup>5)</sup>（以下、引用内のブラケットは筆者）と指摘している。タウラーは説教において具体的に、「師（エックハルト）は永遠の次元から語ったが、（聴衆の）あなたがたは世俗的に理解している」<sup>6)</sup>と述べて、エックハルトの思想の真正性を確認している。もっともタウラーもエックハルトの表現が生む可能性のある信仰上の危険について、まったく無批判であったわけではない。師が聴衆に向けて、神秘的合一に至るための方法（地道な修練）を懇切に説明していない点を難じている<sup>7)</sup>。ゾイゼや師と同じく、神との霊性的合一を信仰者の到達点とみなすタウラーは、それゆえいわゆる正統信仰に沿うかたちで健全な教導を模索していったのである。それはタウラーにおいては、イエス・キリストの生への「まねび」の重視であり、キリストの神性へと移される前提としてのイエスの人性との合一のための指導となった。

エックハルトはその最高の徳である「離脱」（abegescheidenheit）を語るさいに、イエス・キリストは「人間本性」（menschheit）を純粋なかたちで身に受けた存在であるが、われわれ人間は自我に支配されて被造世界に執着することでその本来の「人間本性」を穢し墮落させていると考えた。それゆえ、「人間は自己の内面に徹して、どの点から見ても主イエス・キリストを深く模範として自己をつくり終え、その結果として、自己の内にキリストのすべての業と、主が神として現れた姿が反映しているのを見出さねばならない」<sup>8)</sup>と述べた。ただし彼はそのための具体的方法を工夫して提示する面は弱かった。というより、それは自分には適さないと判断していたようにも思われる。

その点でタウラーは異なる。彼の説教はそのほとんどが苦難のキリストの生にならう——それには十字架上のキリストの傷を身に受ける黙想や聖体拝領（霊的聖体拝領の場合もあり）も含まれる——ことを告げる。神の子は父なる神と完全に一致し——これをタウ

4) G. Steer, Die literarische Abhängigkeit Johannes Taulers von Meister Eckhart und das Problem der Orthodoxie, S.60.

5) ebenda, S.63.

6) Johannes Tauler, *Die Predigten Taulers, aus der Engelberger und der Freiburger Handschrift sowie aus Schmidts Abschriften der ehemaligen Straßburger Handschriften*. hrsg.v. Ferdinand Vetter. Berlin 1910. Reprint. Dublin / Zürich, 1968, S.69.

7) 同箇所を参照。

8) Meister Eckhart, *Die deutschen und lateinischen Werke, Die deutschen Werke, Bd.II*, hrsg.v. Josef Quint, Stuttgart, 1971, S.421.

ラーは glich と示す——無私の生を徹底して生きてそして死んだ。しかし人間は存在上の無を本質とし、罪を犯すという意味で不徳の生——この意味での神との関係は unglich とあらわされる——を営んでいる。この厳然たる事実は、人間の魂の根底 (grunt, genuot) にはびこる自我——カモジ草 zecke がその比喩——が原因である。したがってタウラーの司牧は、この現実を見すえ (warnemen)、そこから神への転回 (ker) を決意し、聖霊のはたらきに導かれて魂の諸能力をととのえ、イエス・キリストのような浄化された魂へと変容することを目指すことになる。それは自我の影響から可能なかぎり解放された、真の意味で無となった浄化された魂のありようである。タウラーはそれが現実となることで、人間にはキリストの神性への移行が起こりうると語る。これはあくまでもこの世の霊的体験であるが、永遠の世での至福すなわち神との合一の前触れなのである。タウラーは、人間の魂をこの神との霊的一致——これはエックハルトの目標でもあった——に向けて導くことを自己の使命として生きた。それゆえ魂の浄化に腐心した grunt 神秘主義といえるのである。

以下、本稿では各説教であらわれる魂の根底をあらわす grunt に注目し、タウラーの grunt 神秘主義の核心に迫ってみたいと思う。そのさい、タウラーの教導において grunt の概念は中心的なものであり、その基本的理解については Vetter 版説教第56と64に示されているといえる。ただしここでは grunt の全体的な理解に至るために、Vetter 版および D・ヘランダー印刷の2説教に現れるすべての grunt の分析を行う（名詞の grunt は前者の81編では621、後者では14存在している）。なお、各説教の番号は〔 〕で示し、その後、grunt の語を含んでいる原文全体を引用する。その場合に、算用数字は個々の grunt を含む Vetter 版の頁数と行数を示し、両者の間にスラッシュ (/) を入れる。

#### [1] 'Von drien geburten'

- (1) „[...], als alle die krefte versamment sint, sinnelichen und guenlichen und bewegelichen krefte, in die obersten, in den grunt, dis ist der ingang.“ (009/28)
- (2) „Wenne der mensche alsus die stat, den grunt bereitete, so ist kein zwifel do an, Got muesse do alzuomole erfüllen.“ (010/09)
- (3) „also ist ir innewendig grunt reht als ein isenin berg, do nie kein licht ingeschein.“ (010/31)

この降誕祭の説教は、「S89」<sup>9)</sup>だけが伝承しているものである。このテキストでは、他の説教のように、朗読される聖書箇所のアラミ語章句が題名とされてはいない。あえてラ

9) シュトラースブルク写本89。

テン語表記をすれば、イザヤ9章5節の ‚Puer natus est nobis et filius datus es nobis.‘ であろう。このテキストでは grunt は3度現れる。

本説教では、父からの御子のパーソナ的区別に基づく誕生、処女マリアを母とする子の誕生、つねに恩寵と愛により魂において起こる子の誕生という三重の誕生が扱われ、その第三の誕生に焦点が当てられる。そのさいタワーはエックハルトとはちがひ、「神の誕生」(gotes geburt) という表現を用いないで、あくまで慎重に「誕生」(geburt) としか言わない。引用に現れる grunt はいずれも、魂の最深の次元を示している。タワーは第三の誕生を強調し、人間は真の誕生を体験する必要があり、そのためには grunt への還帰が不可欠であるとする。タワーは、「誕生が誕生するためには (sol dise geburt geboren werden)、魂は何としても自分の源泉に還り、力を尽くして自分の内に向かい、自分の内に退き、最低および最上の全能力を自分の内に集めなければならない」<sup>10)</sup> と述べている。引用文では、タワーは grunt を、形容詞 ‚ober‘ の最上級の名詞化形 ‚die obersten‘ で言い換えているが、これは魂の「最上部」を意味している。そして彼はひたすら修練を説く。また人間は grunt を「準備する」(bereiten) べきであるとされるが、これはタワーの文脈では人間の自力的行為というよりも、先行する神のはたらきに支えられる自力である。ただしタワーは人間の側の努力を不可欠と見なしており、それに基づき神は満たすという事態が生じている。

さて本説教では、魂の究極の場——ただし神に向けて開かれている——である grunt を準備すべきであるというタワー独特の司牧的観点が濃厚に現れている。また、神が「自己の永遠の本質である本質の深淵を」(den wesentlichen abgrunde sins ewigen wesens)<sup>11)</sup> 見通すという表現があるが、この「深淵」である ‚abgrunt‘ は、タワーが通例人間の魂の深層を示すのに用いる grunt に対して、神の深層を表わす表現である。

## [2] ‚Accipe puerum et matrem eius et vade in terram Israhel et cetera.‘

- (1) „Und darumb suoche es von innan in dem grunde und lo din uzlouffen und din uzsuochen sin und lit dich und la dich und blip do in dem Egiptenlande in dem dünsernisse bitz du von dem engel uzgelanden wurdst.“ (014/25)

第二のテキストの題名は、ラテン語表記となっている。この説教は公現祭（1月6日）に行われたものであり、「F41」「S91」「2W」<sup>12)</sup> の三写本が伝承している。これは熱意に燃

10) V, 9.

11) V, 8.

12) 「F41」はフライブルク写本41、「S91」はシュトラースブルク写本91、「2W」はウィーン第二写本を指す。

えて修道生活を開始したばかりの若い人々に対して、忍耐強い修練の重要性を説く内容となっている。ここでは grunt は一度しか使われていない。

説教では、エジプトへ逃亡していた聖家族がイスラエルの地に帰るようにと、天使に促されるマタイ 2 章 19-23 節のくだりに基づいて、教導がなされる。エジプトは闇を意味するが、その中に留まる人間は早まってエジプトの地を離れてはならない。霊的高慢、肉欲、悪魔など、この世性から逃れて、「自分自身に向かい、還帰して」(zu imme selber und in sich selber keren)<sup>13)</sup> いるべきなのである。そして助けを内面の grunt において求めなければならない。引用中の es は「助け」(helffe) を指している。

### [3] ラテン語タイトルなし

- (1) „O der die mirre in der minnen und uz dem grunde neme do sú Got uz git, welich ein wunnencliche wise wurde geborn in dem menschen...“ (017/22)
- (2) „Ja daz minste und daz meiste liden daz Got jemer uf dich lat gevallen, daz get hie uz dem grunde siner unsprechenlichen minnen und also grosser minnen also die hoehste und beste gabe die er dir geben moehte oder ie gegap...“ (017/26)

この説教も公現祭に行われたもので、最古の写本の一つである「2W」で第23番とされたテキストの、後半の主要部分を独立化させたものである（その前半部は次の Vetter 版第4テキストがになる）。この説教は、魂内での「誕生」は苦しみの体験を通して実現する、というテーマを扱う。ここでは、王たちが幼子イエスに捧げる三つの献上物について語られ（マタイ 2 章 11 節）、そのうちの「没薬」とは、魂が「誕生」を実現するまでの苦しみだとされる。最初の「没薬」とは、神を求めてこの世の全ての快と満足を捨てる苦しみである。それは自然な身体的満足から親しき交友まで及ぶ。次に、神に由来する外的苦しみである。個々の人間を襲う運命も神の永遠からの定めであり、それを救いへの準備として感謝して受け、自己を放棄するべきである。また圧迫や闇という魂の試練である内的苦しみも神から来る。これらの苦しみに身を委ねるなかで香料が燃やされ、聖なる信心という「乳香」が生じる。そして「黄金」であるが、これは人間が自己と被造物に完全に背を向け、神を目指すという改心である。世俗の中には目立たずとも、この生き方に徹している人々がいる。あらわな神と魂そのものの交流こそが重要であると説かれる。

ここで用いられている grunt であるが、最初のものは、没薬が神に由来するという「理由」を意味している。また次は、言い表せぬほどの愛の grunt であるが、これはむしろ限りなき愛の「深み（根底）」ととるべきであって、魂の grunt ではない。

13) V, 14.

[4] ラテン語タイトルなし

[grunt なし]

この説教は、Vetter 版ではラテン語題名が付されていないが、「2W」では「Ubi est qui natus est rex iudeorum?」(マタイ 2 章 2 節)とされている。「2W」の第23番テキストの前半部分を形成している。

ここでは魂内の「誕生」に至る道筋が語られる。自然本性的光(知性)は神の存在をとらえることはできないが、人間が神を求める願いに神的な光(神の恵み)は反応し、「誕生」の場を示す。この光は、黒ガラス(感性的次元)と黄ガラス(知性的次元)を貫くことによって、人間が自らの被造性から離脱することを可能とさせる。そうして人間はその自己否定を契機として白ガラスに入るのである。その到達点は純粋であらわな霊そのものの次元である。

この説教では、魂の根底を表わす grunt は用いられていない。

[5] ラテン語タイトルなし

- (1) „Got enbegert noch enbedarff nüt in aller der welte denne alleine eins dinges,[...], daz ist daz einige das er den edeln grunt den er in dem edeljn geiste des menschen geleit hat,...“ (022/07)
- (2) „Nu waz sol der mensche herzuo tuon daz Got in disen minnenlichen grunt erlúhten und gewürcken múge?“ (022/12)
- (3) „und von disem ufstonde so wurt diser grunt berueret mit einer swinden begerungen und in der inblosstekeit und inblosende aller ungelicheit,...“ (022/16)
- (4) „und gat dicke an dem beruerende des blossen grundes durch fleisch und bluot und durch daz marg.“ (022/19)
- (5) „.... domitte verirrent sú disen grunt...“ (022/23)
- (6) „.... in disen wisen wellent sú iren grunt bereiten und do inne den friden haben,...“ (022/28)
- (7) „.... so sol man bekennen daz sú disen grunt selber wellen bereiten...“ (023/01)
- (8) „....und daz Got in disen grunt nüt gewürcken enkan,...“ (023/02)
- (9) „....und davon werdent sú erlúhtet, die lossent Got iren grunt bereiten...(023/09)
- (10) „....daz das sú Got iren grunt bereiten lossent und nüt sú selber:...“ (023/24)
- (11) „.... die ersten die iren grunt mit in selber wellent bereiten und sich nüt Gott lossent daz er in bereite,...“ (024/06)

- (12) „...süllent denne nüt dise lüte wellen das Got iren grunt bereite? (024/14)
- (13) „..., er ensülle allewegent ufston und ein ufrihtunge des gemuetes in Got und in ein entlidigen des innewendigen grundes,...“ (024/21)
- (14) „Diser grunt git des selber gezúgnis in in selber...“ (024/25)
- (15) „...disen grunt wil Got alleine besitzen...“ (024/26)
- (16) „Got wúrket in disem grunde mit mittele als in den ersten lúten,...“ (024/27)
- (17) „...aber waz er(Got) in disen lúten in den unvermittelten grunt wúrcke,...“ (024/29)
- (18) „wanne das Got disen grunt in der worheit besessen hat,...“ (024/32)
- (19) „...obe Got út in disem grunde vinde...“ (25/03)
- (20) „das ime widersto sins edelen unmittelichen werckes zuo wúrkende in dem grunde.“ (25/05)

この説教は、「2W」の第24番であり、それにはイザヤ60章1節の ‚svrge illuminare, iherusalem‘が題名として冠されている。このテキストには成立時期を推測させるものは認められない。また、タウラーの説教に特徴的な「聴衆への呼びかけ」も欠落しており、いる。そこから、本テキストは論述であったのかもしれない。

この説教では冒頭からただちに中心テーマに入り、神が人間の魂内で働くための条件とは何かという問いに切り込む。その答えは、魂の grunt の「準備」(vorbereitung)である。その後、この準備をめぐる議論が展開される。

タウラーが人間側に求める能動的行為とは、神に向けて「起き上がる」(surge)と表現されるが、それは自己と被造物を離脱することを意味する。神は人間のその自力的努力——それは常に神の先行的はたらきを前提とする——において人間の魂を「照らし」(illuminare)、魂の grunt を準備していく。ここには人間と神との協働が成立しており、魂は神のはたらく場として徹底的に純化されるのである。そして神は人間の「肉と血と髓を貫いてあらわな (blos) grunt に触れる」のである。

しかしこの神による grunt の接触の事態に関連して、タウラーは二通りの反応をする人間を区別する。それは知的で賢明にふるまう人々と高貴な (edel) 人々である。前者は知性によって魂の grunt を準備しようとするあまり、grunt を「乱す」(verirren)。彼らの準備とは、神を支えとしない自力の行為である。それゆえエルサレムすなわち平和を得たように思えても、それは偽物にすぎない。信仰者の生き方の基礎となる自己否定と愛と謙遜を得ていないからである。反対に、後者は「起き上がって」自己を真に神に任せており、神に準備してもらっている。この人々は、罪に傾く弱さから誘惑を受けることになっても——これは不可避である——その状態ごと神に還帰するのであり、彼らの霊性はその透明性をいささかも失わない。神は彼らの中で「媒介なしに=直接的に」(svnder mittel) はたらいている。

本テキストは短いが、grunt は頻出して20回を数え、そのすべてが魂の grunt を示している。この grunt は本来、高貴で(1)、麗しい(2)、内的な(13)ものであり、神に触れられ(3, 4)、神の直接のはたらきを受ける(8, 17, 20)ために準備されるべきものである(6, 7, 9, 10, 11, 12)。そのために grunt は神だけが所有する(15, 18)、あらわな(4)ものでなければならない。この grunt はエックハルトの場合とは異なり、自己否定のない人間の自力的行為で侵されうる(5)心理学的な概念でもある。

[6] 'die ewige worheit : min joch daz ist senfte.'

- (1) „Der innwendige edel mensche der ist uz dem edelen grunde der gotheit heruzkommen.“ (025/20)
- (2) „...das der edel wunnecliche grunt hat von naturen, das mag sú erkriegen von genoden.“ (025/23)
- (3) „Wie Got in dem inwendigen grunde der selen gegründet het...“ (025/24)
- (4) „...das er(mensch) in disen grunt nit kan gesehen,...“ (026/14)
- (5) „...das sich diser verborgen grunt nüt mag erdecken noch erbilden,...“ (026/21)
- (6) „...wer nie darin gesach noch die grundes nie gesmachte,...“ (026/23)
- (7) „Welch mensche das doch nüt zuo dem minsten einest an dem tage sich in erkert in den grunt, doch noch sime vermügende, der enlebet nit also ein recht christen mensche.“ (026/25)
- (8) „wanne wo dies gesmacket ist, diser edel grunt, da trucket er und zühet so sere, es zühet daz marg uz den beinen und daz bluot uz den adern.“ (026/31)

このテキストはマタイ11章29節に依拠したものであるが、内容からするとミサの説教ではなく、霊的生活の指針を示した論述的な性格のものである。成立時期を明示するものは見受けられない<sup>14)</sup>。

タワーは本説教でも、人間は神によって魂を準備してもらうのであり、前提として自己自身の grunt の状態を認識していなければならないと説く。grunt は神が人間の魂に基礎づけたものであり、神と交感するこの魂の最深奥の grunt を「見つけ、認識し、観想する」(vinden, bekennen, beschovwen)<sup>15)</sup>者は、外的世界に迷い出ることがあろうとも、必ず grunt に引き戻される。この grunt を下方に突き抜けて、人間が神の似姿として創造された「神性の高貴な grunt」に向かい、そこに到達して安らうことが、人間の最終目標で

14) ルカは、この節を含む聖書章句が公現祭後の第五主日に読まれることから、このテキストは二月初旬に成立したものと推測している。『タワー全説教集Ⅱ』、行路社 1991年、192頁参照。

15) V, 25.



あるのだとして、説教家は新プラトン主義的・アウグスティヌス的な考えを語る („quia fecisti nos ad te et inquietum est cor nostrum, donec requiescat in te.“: Conf., I. I.)。先述したように、タウラーは神性あるいは神の究極を表現するさいには grunt を用いず、たいいてい abegrunt を充てるが、ここでは例外である。

この章句は「くびき」(joch) を語るが、タウラーはそれを楽に背負えるのは、被造物への執着を断って、内面に向かう (sich keren) 者だという。魂が自己を俗界から永遠へと転じるにつれて、神を受容するに相応しくなるからである。真の「離脱」(abegescheidenheit) によって魂は純粹になり、いかなる像から自由となって、grunt の内に本来映し出す「神という像化されぬ像」(unverbildet bilt daz Got ist)<sup>16)</sup>を認識することになるわけである。

次にタウラーは「くびき」から「荷」(bürde) に目を移し、これを様々な苦難が襲いかかる外的人間と解釈する。本来「荷」は軽いものであるはずである。そうならないのは、人間が自己を放棄して神にすべてを委ねる生き方に徹していない点にある。離脱して神の意志を謙虚に受ける者、その人間にとって神から与えられる苦しみは、自己を浄化する恵みの「荷」なのである。

このテキストでも、grunt の数は比較的多い。まず神あるいは神性の究極の次元をあらわすために grunt が用いられていることを指摘しなければならない。この点、通例神の究極の場と人間の究極の場をそれぞれ abegrunt と grunt として、存在論的区別を明確にするタウラーでは稀なことである。(1) と (2) は神の次元の grunt を示している。またタウラーは grunt を魂の究極の場としている (3)。ここでは grunt は隠れたものであるが (5)、覗き見 (4)、味わう (体験する) (6) べきものとして、動詞と関係づけられているが、とりわけ重要であるのは、grunt に還る (7) であり、この ‚keren‘ と grunt との結びつきは、タウラーの説教全体の特徴的表現となっている。また grunt はその本来の高貴さゆえに、あらわになれば、人間の身体にも大きな影響を及ぼすといわれる (8)。

[7] ‘Simile est regnum celorum...’

- (1) „daz sú grosse werg tuont, also vasten und wachen, und bettent vil und ennement irs grundes nit war.“ (029/32)
- (2) „...alle ire goben tragent sú wieder in den grunt do es geborn wart...“ (030/17)
- (3) „Mer do sint inne verborgen in dem grunde die lebenden odern uind die edele kraft.“ (031/14)
- (4) „...der die lebenden aderen bekante die in dem grunde ist do sú irme teile enpfallent und Got ir teil und ir enthalt ist...“ (031/20)

16) V, 26.

- (5) ....er sol sich selber besniden von aller unordenungen und daz von grunde heruz rüten in allen wisen und neigungen.“ (031/26)
- (6) ....sú lossent die untugende und die unrechte neigung in dem grunde der nature...“ (031/32)
- (7) ....in dem insinkende in warre underworffener demuetikeit, in den grunt, in Christum...“ (032/07)
- (8) ....in Christum, in der worheit, nüt mit gelosen, sunder von grunde...“ (032/08)
- (9) ....rechte also sol der mensche sich undergraben mit tieffem gemercke sin grundes...“ (032/15)
- (10) ....umbe daz die goetteliche sunne deste unmittellicher dem grunde múge genehen...“ (032/16)
- (11) „do die goetteliche sunne disen grunt unmittellichen beruert...“ (032/25)
- (12) „gezogen in den tieffen grunt der hellen...“ (033/02)

マタイ20章1～7節の「ぶどう園」の喩えを扱ったこの説教は、ホミリーの解釈で始めながらも徐々に、タウラー独自の神秘主義的司牧へと移行していく。ぶどう園の主人とはキリストである。またぶどう園は、荒れ果てたままに放置されている人間の自然本性である。そして主人がぶどう園に誘った、日がない仕事もなく佇んでいた人夫たちとは、霊的の道を進むようにと神から呼ばれた人間を示している。タウラーは本来この章句が告げている、神からの恵みは個々の人間が行った業の多少によって左右されるものではないという主旨には触れない。

タウラーは召命に従う人間を、初歩者、進歩者、愛すべき者に分ける。初歩者とは、いまだに信心業を果たすことで満足し、人間的な自然の情に支配されていて、魂の grunt の深刻な状態を吟味していない人々である。さらに進歩者とは、感性的な信心形式を乗り越え、人間としての欠陥を克服し終えた、「至高の真理」(aller neheste worheit) への到達を喜びとする人々である。最後に来るのは、自己の内なる神だけを愛し、自己を完全に放棄して神へと還流していく人々である。この愛すべき者は、自分にも被造物にも執着せず、喜びや快をも問題とせず、ただ神性に向けて開かれている魂の grunt に流入している。ただしタウラーは、この高貴な人々も神の恵みを糧として霊性の道を歩んでいるのだ、とその日常性を指摘することを忘れてはいない。彼らはいたいは目立たない人々である。

タウラーはさらに、ぶどう園の主人が樹から悪い枝を剪る作業に触れて、人間も自己の魂の grunt から不徳や悪への傾きを取り除くべきだという。ただしそれには熟慮が必要となる。園の主人は不要な枝を切り取ると、ぶどうの樹の枝を柱で支えるもののだが、この柱こそが、キリストの生涯と姿と受難である。これは人間がキリストを模範として、その五

感、知性、意志などの諸能力を正しく働かせることを意味している。それによって、太陽は直接ぶどうに光と熱を及ぼし、その表皮は薄くなり、甘みを増していく。最後に、葉を剥がすのであるが、これは魂からあらゆる妨げが奪われることである。もはや諸聖人の像も修練の仕方も修練自体も不要となる。ただしこれはあくまで漸次的な過程であって、短兵急に結果を急いではいけない。タワーの教導では、この時熟が重要な意味を持っている。

さてここに至ると、人間の霊は、ぶどう酒の樽の中に一滴の水が落ちて、ぶどう酒自体と一つになって消えるように、自己の存在を失ってしまう。タワーはこのさまを、「区別できぬ純粋で静かな親密な一致」(ein luter stille heimliche einekeit sunder alle underscheit) という。いわゆる神秘的合一である。ただしそれは神と人間の霊が存在論的レベルで同一となるというわけではない(タワーのよく用いる表現では、非類似 ungleich おける類似 glich である)。

この説教では grunt は12回用いられている。(1)では、タワーが教導において信心業よりも強調する「grunt の(状態の)認識」(des grundes war nemen) がいわれているが、これはタワーの思想の中心をなす行為である。(2)の grunt は、それが神の賜物が生まれた場であり、人間もそこへ賜物ごと還流するのであるから、これは神性の grunt と解するのが自然であろう。第三の愛すべき者の内心の表現に用いられた(3)は、魂の grunt を示している。(4)もこれと同様である。(5)は von grunde heruz で「徹底的に」を意味する。(6)は直訳すると「自然本性の grunt」であるが、むしろ本来の尊い純粋な grunt と解することができ、魂の grunt であると読める。(7)の grunt は人間を支える柱であるキリストという根底とするべきである。(8)は(5)と同じく「徹底的に」という意味。(9)の grunt は自己自身の認識と関連しており、魂の grunt である。(10)は太陽が神を象徴しているところから、魂の grunt を示しているといえよう。(11)も同じである。(12)の grunt は地獄の最深の場を指している。

[8] 'Erat festus judeorum.'

- (1) „Die ander pforte das ist ein flissig bibliben bi dem grunde.“ (035/32)
- (2) „...ungewarnet uzlovffent von irme grunde in guot schinenden wisen und werken...“ (036/01)
- (3) „Der mensche solte in allen sinen werken und uzgengen sins grundes ein flissig warnemen haben...“ (036/06)
- (4) „...das ist das got uns alleine besitze unsern grunt...“ (036/27)
- (5) „...zuo dem milten almuesen des lutern guotes daz Got selber ist; das mag in alleine begnuegen in sime willen und in sime grunde...“ (037/11)

- (6) ....also daz man von ime empfangen hat luterlichen also wider in den ursprung, in den grunt do es uzgeflossen ist....“ (037/16)
- (7) ....weschet sich rechte in Cristo in sime hochguldigen bluote; usser disem grunde diser begerunge so wurt er erliche gesunt....“ (038/14)
- (8) ....der diseme grunde wol noch ginge in der waren gebeitsamkeit....“ (039/04)
- (9) ....daz er in einer samenungen aller siner krefte in sinem indewendigen tempel in sinen tieffen grunt kum:...“ (039/33)
- (10) ....in dem lutern bekentnisse in dem innewendigen tempel in sime grunde Got funden het...“ (040/06)

この説教はベトザタの池での病人の癒し（ヨハネ5章1～15節）に基づくホミリーであるが、それを通じてタウラーは魂の長期間の浄化過程について教える。説教家は冒頭で聖書の物語のあらましを述べると、続いて比喩的解釈を加えていく。池の水とはイエス・キリストであるが、動く水は神であり人である御子の血である。キリストは愛する人々をその血で洗うというのである。その水の動きをじっと待つ病人とは、神との古い契約（旧約）に拘束されて生きている人々である。タウラーは世の終末に救われるのは、この水に触れる人間だけだと語り、キリストの血によってのみ救いは可能であるとする。また天使が水に触れた後に池に入るのは、生活上の難儀からや教師に諭されて来る人々であって、彼らはその安穩とした信仰生活のゆえに、結局は煉獄での浄化を待たねばならないという。

つぎにタウラーは五つの回廊が、イエスの五つの傷と五種類の徳の修練を指していると述べ、後者を順次説明する。第一の回廊は自己否定に基づく深い謙遜であり、人間はこの徳によって神に自分と被造物をゆだねるのである。第二は、熱心に自己の魂の grunt にとどまることを意味する。内的な平和を維持するためには、自己の存在の根（の状態）をたえず認識している必要がある。さらなる回廊とは真の罪の痛悔であるが、人間はこれによって神以外のものや神を淵源としないものを拒絶し、「愛すべき純粋な善」（das minnenkliche luter guot）たる神の内に沈み込むことができる。四番目の回廊とは心の貧しさを指す。それは通例の貧困ではなく、全人間が招かれている本質的清貧のことであって、神だけが自己の魂の grunt の所有者であることを意味する。最後にタウラーが強調する回廊とは、人間がどの瞬間にも全てのものを神に戻し、神に捧げるという修練を意味する。本来神の所有であるものを掠め、手放さないでいる執着が、ここで厳しく戒められる。

人間がようやく上記の段階的な修練を経て、その池の水に触れると、はじめて聖霊は天から下ってその人間の内面に触れ、彼は完全に変容させる。こうした人々は死ぬ前にキリストによって天国の前味を与えられるわけである。

タウラーは三十八年間も待っていた病人の例を挙げて、忍耐強く待ち続けることの意義

を説く。ただしその場合も「立ち上がる」(ufstan) という人間の能動的姿勢が前提とされている。

本説教でも、grunt は十度使用されている。(1) は魂の grunt そのものを指し、(2) も軽はずみで慎重さを欠いた人間の生き方を批難しながら、魂の grunt に触れている。(3) も魂の grunt の状態をつねに吟味せよとのタワーの教えに沿うものである。(4) は神だけが本来の所有者であるとする魂の grunt をいっている。(5) は「意志」と同等で用いられているが、魂の grunt と理解しても差し支えはないであろう。(6) は神から受けたものが流れ出た場を意味し、源泉 (ursprung) と同等であり、神の grunt といえるであろう。(7) の grunt とは、望み (begerunge) の「結果」を示している。(8) は神の「摂理」を意味すると読める。(9) と (10) は「内的神殿」と同義であったり、「そこで神が見い出せる」という説明が加わることで、魂の grunt を指しているのが明白である。

この説教では、タワーが魂の根または根底を呼ぶときに用いる、grunt とはちがうもう一つの表現である gemuete (心底) が用いられている点が、特徴的である。

[9] 'Jhesus ging us in die ende der lande Tyri und Sidonis.'

- (1) „Kinder, merkent disen grunt! Welches sint die lúte (schriber, phariseen) von den daz Jesus usging?“ (041/05)
- (2) „Hiebi sol man bekennen zwen die schedelichen grunde die under geistlichen lúten gesin mugent.“ (041/09)
- (3) „...in dem grunde do die worheit heruz quellen solten, da blibent sú itel und wueste...“ (041/16)
- (4) „...(sie) wellent in den geachtet sin und geruemet sin, und aller ir grunt der stet vol urteils uf alle die die der wisen nüt ensint...“ (041/21)
- (5) „Vor diser phariseilichen wisen huete sich jegliches in sime grunde, obe sich ein valsche heilikeit do verborgen habe...“ (042/01)
- (6) „...aber der grunt ist zuomole bekumbert mit den creatures und scheidelichen bevangen...“ (042/05)
- (7) „...also tuont ouch die juden, dise venient, vastent, bettent, und jedoch so ist ir grunt got nüt...“ (042/08)
- (8) „...do er (Got) sine pflantze in dem grunde nüt envindet, die werdent alle uzgeworffen...“ (042/16)
- (9) „Kinder, dis sint zwene valsche gründe, die nu regniertent...“ (042/17)
- (10) „Kinder, hie wurt der grunt bereit obe allen den bereitungen die man iemer erdenken mag...“ (043/31)

- (11) „Wie muos sich die begerunge hie wieder in den grunt hiemitte ie me und ie me erbeiten und bereit werden!“ (044/03)
- (12) „...sú ging mit dem jagen in den grunt, noch naher trang sú hinin in daz abgrunde...“ (044/18)
- (13) „O kinder, die alsus einen waren inslag kunnent geraten in dem grunde der warheit...“ (044/24)
- (14) „...nüt mit glosen noch mit den worten noch mit den sinnen, sunder in dem woren grunde, daz in Got noch alle creturen so tief nüt kundent vertrucken...“ (044/25)
- (15) „...war bibliben bi dem grunde in vollehertunge...“ (045/01)
- (16) „Und aldo lie sú sich zuo grunde in ein ewikeit...“ (046/01)
- (17) „Dise selbe persone wurt noch alle tage uf denselben weg antweder in den grunt oder auf den selben weg gezogen...“ (046/05)

この説教は、イエスが異教徒であるカナンの女の深い信仰を受け入れた物語（マタイ15章21～28節）に関するホミリーである。これも説教8番と同じく、四句節に朗読される箇所を扱う。

タウラーはここでも、神に至る霊的深化の道程を語るが、それは伝統的な「浄化・照明・一致」とは異なる。「外出・圧迫・一致」の三段階である。ここでは最初の二つの段階が考察されるが、とりわけ中間段階の「圧迫」に焦点があてられる。

説教家は冒頭で物語のあらましを述べるとすぐに、重要点は女の「(神への) 還帰」(ker)にあると指摘し、このあり方は「この世で得られる最も高貴で、最も有益な、最も確実で、最も本質的な」(aller edelst, nützest, sicherst, wesentlichen)<sup>17)</sup>のものであると述べる。このように聴衆に説教の要点を提示したあと、章句の比喩的解釈に移っていく。

タウラーは、イエスは律法学者とパリサイ派から「出て行った」(uzgan)と言う。前者は、知識が豊富で理性を巧みに用いて気高い言葉を語る人間である。また後者は、自分の霊性の深さを誇る人間であり、人々から尊敬されることをうれしがる輩である。どちらも自我の支配を強く受けており、真の霊的人間となるための条件である自己否定と謙遜に至ってはいない。彼らの魂の grunt は「毒されて」(schedelich) いて、自分たち以外は誤った人間だと判じている。タウラーは、この二タイプの人間とは実は、誰もが陥りやすい傾向性のことだと述べ、特にパリサイ的生き方に関しては、神だけが魂の grunt の指向する対象でなければならないとする。知的な高慢と偽りの敬虔は、キリストが決して受け入れないものである。

さてイエスが向かったのはティルスとシドンの地であったが、タウラーによれば、前者

---

17) V, 41.

は「圧迫」(getrenge)、後者は「狩り」(jagen)を比喩している。人間の心(内なる人)は自己の本源である神に向かおうとして体(外なる人)を狩る、つまり追い立てるが、当の体は被造物を求めて奔走し、両者は分裂する。すると神が両者を狩ることになる。それによって不安と圧迫(「テイルス」)が生じるが、人間はそれを耐え続けねばならない。その自己放棄の修練の中で、神が魂の grunt を準備していくのだからである。自己を完全に神に向け、たえず神に「還帰」して生きること、これがタウラーが教示する内容である。

この説教は17回の grunt を数えている。(1)は魂の grunt ではなく、「理由」か「意味」の謂いである。(2)は二つの否定的な状態にある魂の grunt を指す。(3)も、真理が本来出てくるはずの魂の grunt を示している。(4)は、他人を裁こうとする魂の grunt の誤ったあり方を示している。(5)も魂の grunt のことである。(6)では、エックハルトの grunt とは違って不壊の性格のものではなく、被造物や世俗の世界からの影響を受けやすい、心理学的色彩の濃厚な魂の grunt がいわれている。(7)ではユダヤ人の信心を批判する中で、魂の grunt に言及されている。(8)も魂の grunt であり、(9)ではその複数形が示されている。(10)は、神が人間の grunt を準備することを述べている。(11)(12)も魂の grunt を指す。(13)は真理の「究極」を指していて、魂の grunt ではない。(14)(15)は魂の grunt である。後者の ‚bi dem grunde bibliben‘も、タウラーの教導上の重要表現である。(16)は「完全に」を意味し、(17)は「限りなき自己放棄」を意味すると読めるので、魂の grunt ではない。

[10] ‘Ego sum lux mundi dicit dominus.’

- (1) „...in irme grunde so sint sú phariseen und sint vol eigener minnen und eigens willen...“ (048/62)
- (2) „Dirre grunt muos grossen flis han; die wile der mensche lebet, so wurt er niemer gantz getoetet...“ (048/21)
- (3) „...grosse sorge an das es in muesse swerlich ergan an ireme ende, wanne sú nüt Got in in vindent in dem grunde;...“ (049/17)
- (4) „...des muessent sú von not nieder in den grunt vallen. Dise lúte sint tusent werbe soerglicher dran wanne die gemeinen weltlichen lúte,...“ (049/19)
- (5) „...sú verstont es wol und hant es wol in den sinnen und in der vernunft, mer in dem grunde ist es in froemde und verre in dem gesmacke...“ (050/15)

この説教がいつどこで行われたかは不明である。ヨハネ福音書に基づいているため、可能性としては復活祭の数日前と想定することもできるが、確定できない。この説教も、真の光である神への「還帰」(ker)のテーマを扱っており、新プラトン主義的傾向を示して

いる。タワーはここで「神の友」の生き方とはいかなるものかを、偽りの信仰者と対比させて説明する。

すべての存在は神である光から流出して、光に還帰すべきものであることを前提に、神を信じる者もそうでなければならぬ、とタワーはいう。しかし人間を観察すると、実際に自分自身がその妨げになっている人々がいる。それは、被造物に執着したり、五感の満足から逃れられなかったりする人々であり、また厳しい修練を自らに課しながらも、根底に我意をひそませている人々である。後者をタワーは聖職者であると指摘しているところから、現実にもそうした傾向があったのであろう。この人々が「神の友」と区別される点は、彼らが他人の生活の仕方やその信心を非難しながら、自己を裁くことがないということである。これをタワーは「パリサイ的」態度とするが、その克服には自力は通用しないとす（鉄の山を突貫するほどの困難さだという）。それは神が魂の *grunt* を充たすことでしか可能ではない。ただしタワーはこの完全な克服は現世では実現しないと、この世での限界を認める悲観的な発言をしている。

それでもタワーは、「源泉たる真の光に還帰する仕方と、そのための真実の最短の道」(*die wise und der wore kürzeste weg zuo komen in disen ursprung und in dis ware licht*)<sup>18)</sup>を指摘し、それが自己否定と神だけに向けた愛と熱意によるものだと、聴衆を鼓舞する。これによって、「(神からの) 完全で直接的な流出と(神への) 還流」(*ein ganz unmittliches usflus und widerflos*)<sup>19)</sup>という循環は妨げられず、人間は自己も被造物もすべて神に捧げ返すことになるのである。これをするのが神の友であり、それ以外は偽りの友である。両者は神からの苦しみをどう耐えるかによって区別され、神の友は「苦しみによって神へと逃れ、神のために苦しみを耐え、神から苦しみを受ける」(*mit dem liden*) *fliehent die woren Gottes fründe in zuo Gotte und lident dis ie me und nement dis von ime*)<sup>20)</sup>のである。その彼においては、苦しみはもはや苦しみではない。自分の魂の *grunt* で神を見出しているからである。人間には神から秘跡が与えられているが、これらも、「人間が源泉と原初に還る」(*in den ursprung und in den begin gon*)<sup>21)</sup>さいの助けになると、タワーはいう。

本説教では *grunt* は五回使われているが、(1) はもちろん魂の *grunt* であり、(2) はパリサイ的に毒されたという魂の *grunt* である。(3) も魂の *grunt* であるが、そこは神を見出す場だとされている。それに対して、(4) は転落する「淵」を否定的に意味している。(5) も魂の *grunt* を指している。

18) V, 48.

19) 同頁。

20) V, 49.

21) V, 50.



[11] ‘Si quis sitit, veniat et bibat...’

- (1) „Do wurt der burne getruncken uz sime eigenen grunde, uz der waren wesentlichen quellen...“ (055/09)
- (2) „Aber sú sinckent und entsinckent in den grunt, rehte also ein wasser daz uf eime ertrich gestunde und insincket in daz ertrich...“ (055/15)

これは聖霊に関する説教であり、ヨハネ7章37、38節に基づいて修道女に神秘的司牧を試みている。鹿が狩りに遭うときの「渇き」(turst) から始まり、それを癒すための「飲む」(trincken) へと展開し、見事な説教を形成している。

タウラーは受難週を迎えている今、まずはキリストと共に苦しむことの意味を説き、それがキリストの栄光と至福への到達を可能とすると述べる。

その上で、「渇いている人は、わたしのところに来て飲みなさい」(wen do dürste, der kumme zuo mir und trinckel!)<sup>22)</sup> というヨハネの章句から「渇き」の比喩に入っていく。この「渇き」とは、タウラーは聖霊のはたらきによるもので、愛の炎が燃え、神への渇きと愛に基づく望みが生じるとする。ここでは愛の火花 (minnefunke) という重要な概念があらわれる。さらに詩篇42章2節の「喉の渇きが鹿を泉に走らせるように、主よ、私の魂は渇いて神であるあなたを求め」(reht also den hirtz túrstet zuo dem burnen des wassers, also, here, túrstet min sele zuo dir, Got.)<sup>23)</sup> に移行し、鹿を霊的初歩者として説明を加えていく。この狩りはこの世に背を向けるための苦しみで、人間が有する七つの大罪ゆえに激しいものである。初歩者である鹿は自分を襲う大きな犬から解放されるために、キリストという十字架に犬の頭をぶつけて割らねばならず、そうしてようやく大きな苦しみから逃れることができる。しかしその後も小犬という誘惑が襲うために警戒せねばならない。

タウラーは神が人間を狩るのは神自身に到達させるためだと述べ、そこに神の信実と愛を見ている。人間はすべての攻撃をすり抜けて神に達し、そこで思いきり「飲んで」酔い、「有頂天で歌う」(jubilieren) ようになる。この超自然的次元を理性的な人間は理解できない。

もちろんこの有頂天で事は終わらない。神は彼らを覚まして、われに返すのである。そうして彼らは慎重になり、信仰を強めて落ち着くことになる。

タウラーによれば、これらは最低の段階の事態であって、神自身は最高の次元に住むという。それは魂の grunt を暗示している。人間はそこで「形のない善の隠れた闇」(daz

22) 同頁。

23) V, 21.

verborgen vinsternisse des wiselosen guotes)<sup>24)</sup>へと導かれて、「単一で無形の一における一」(die einikeit in der simpelen wiselosen einikeit)<sup>25)</sup>に入る。この闇は否定神学的な闇であり、知性や自然本性には到達できない「本性的な光」(das wesentliche lieht)なのである。この神の最内奥 (abegrunde) で人間は魂の grunt から飲むことになる。

神は第二段階で、人間をして人間を超越させ、永遠のいのちの真の前味 (ein war fürs mag des ewigen lebendes) を与える。

これは比較的長い説教であるが、grunt はわずか2回しか使われていない。このうち (1) は ‚sein eigen‘ からして魂の grunt のことであり、(2) は例外的に神の最内奥を表すと考えられなくもないが、第一段階のことでもあり、やはり魂の grunt と理解すべきであろう。

[12] ‘Tempus meum nondum advenit, tempus autem vestrum semper est paratum.’

- (1) „...wenne sù kein hochgezit envindent in irme grunde also sù bettent, noch Gottes gegenwertikeit nüt enfuelent...“ (057/16)
- (2) „...wir mit ime habent ein unbekumberten grunt, der nüt inne enhave denne Got luterlichen;...“ (057/37)
- (3) „...hie inne envindet man is hochgezit nüt, das alte es enwerde ingeneiget und geendet, das nuwe inkomme in den grunt und in die luterkeit...“ (058/07)
- (4) „...daz er in underscheit seite des wesens des heiligen ordens und den grunt, dis subjectum darumb daz er alle dise gesetzedez gesetzet hette...“ (058/20)
- (5) „Do sach er in den grunt und daz wesen und sprach das es were wore goetliche minne und demuetikeit...“ (058/23)
- (6) „Dis ist der grunt Got zuo minnende von gantzeme luterme herten und nüt darzuo...“ (058/25)
- (7) „Got disen grunt frilichen und gewalteclichen besitzen múge...“ (058/30)
- (8) „...in dem edeln minnenclichen grunde do er (Got) sin goetliche bilde ingeleit. hat...“ (058/31)
- (9) „Dis ist die meinunge und der grunt, und dis ist daz wir uns me Gotte gelobt und gesworn hant...“ (059/01)
- (10) „...so hant wir den orden, den grunt, den wesentlichen orden, den unser vatter. gemeinet hat...“ 8059/03)
- (11) „...disen orden bitte ich úch daz ir lerent von grunde Got minnen...“ (059/07)
- (12) „...so muessent ir irme einen lutern unbekumberten grunt erbieten...“ (059/18)

---

24) V, 54.

25) 同頁。

この説教は、受難週の火曜日に朗読されるヨハネ7章1～13節の福音章句に基づいて行われたものであり、魂の grunt に隠れて現存するキリストに仕えることを、聴衆の修道女らに説くものとなっている。これはウィーン第二写本では33番目に配列されている。

タウラーはここで、イエスが弟子たちに上って行くように促すエルサレムの祭とは、「永遠のいのち」の祝祭を指し、神はそこに現存するという。厳密に言えば、この世では人間は永遠のいのちに到達できないが、自らの魂に神が内在するという体験を、天国の「前味」(fürsmag)として得ることができる。これは人間が本性的に望む体験であるが、それには全事物からの離脱と神のみを求める純粋な熱心が必要である。その場合に神を感じられなくても、神は隠れた仕方確実に現臨している。だからわれわれは「内面に還り、自分自身を超えて起き上がるべきである」(inwert süllent keren und ufgon über uns selber)<sup>26)</sup>と、タウラーはいつものように主張する。

またタウラーは修道会というものの本質について触れ、その目的は「内面に神だけを有する grunt を神と共有する」ことだとする。別の言い方をすれば、神が「grunt の内に自身の聖なる像を置いた理由が、自分だけで grunt を所有することであったために」、神に対して「純粋で煩わされていない grunt」を差し出す修練であり、修道会はその「償い」の場だということである。タウラーは修道女たちに修道生活に召された意義を説き、そのために自己の内面で真の祭を祝えるように、内面に還り自己を放棄せよという。

本説教では、grunt は12を数える。(1)は grunt が「祭」すなわち神の現存が体験される魂の最内奥の場だとされる。(2)も魂の grunt を指しているが、この grunt は様々な原因で妨げを受けたり、神以外の被造物への執着によって墮落したりするという心理学的性格のものである(この点、grunt を汚れぬ性格のものとするエックハルトとは異なる)。(3)の grunt は、新約的な修練は旧約のそれとは違い、本来的に魂の grunt の浄化に向かうものだとし、魂の grunt を指している。(4)の grunt は修道会の本質と同格で、設立の「理由」を意味する。(5)の場合も同様である。(6)は心を尽くして神を愛するのが修道会の本来のあり方であるとして、grunt はその「根拠」を指している。(7)は神がひとり自由かつ力を持って所有することを望む魂の grunt である。(8)は魂の grunt の別の特性を示しており、それは神の像が内在する最内奥の場であり(タウラーは他説教では、アルベルトゥス・マグヌスが三位一体像が置かれている場だと述べたことを紹介している<sup>27)</sup>)、それゆえ高貴できわめて愛すべきものである。(9)の grunt は会則の意味と並ぶ「理由」を示す。(10)では、修道生活の「根幹」を意味する。(11)は「心から、徹底的に」のことであり、魂の grunt ではない。(12)の grunt はやはり魂の grunt であり、墮落の可能性を克服することがいわれる。

この説教は grunt が頻出するが、魂の究極概念とは異なる意味でも多用されている。

26) V, 57.

27) V, 347.

[13] 'Oves mee vocem meam audiunt.'

- (1) ....in bevindender smackender wisen, also es uz dem grunde heruz ist quellende also us sime eigenen burnen und us der fointeniern.“ (061/15)
- (2) ....kerent in den innewendigen grunt, in die wurtzele, also verjehent sú Gottes in bevintlicher wisen...“ (062/21)
- (3) ....ein neigen zuo allem guete, daz ist iemer ein aller worst zeichen das daz guot in irme grunde ist...“ (063/08)
- (4) „das man des also blos und also lidig sye in dem grunde und in der haltender wisen also die nie kein guot werg getotent weder gros noch kleine...“ (064/31)

本説教は、ヨハネ福音書11章22～28節に基づくもので、ウィーン第二写本でもフェッター編集本でも、前説教の次に置かれている。前者では第34番となっている。これは前説教の翌日、受難週の水曜日に行われた。このテキストは一見ホミリーのようであるが、実際は、霊的旅程をめぐるテーマ説教である。ここでも grunt 概念をめぐる神秘教育が意図されている。すなわち、信仰者には重要な信仰上の体験である内面の平安と確証は与えられているが、霊的な慰めは奪われるものであり、その慰めを諦める行為が神の前で気高い価値を有するということである。

さて、エルサレムに来てイエスが神殿に入ったという箇所から、タワーはこの神殿を人間の魂に喩える。その時は献堂式が行われていたが、この式が献堂の祝福を新たにしているものだという点から、魂の新化 (*vernuwunge*) であると説明される。この新化とは源泉へと還帰することを意味し、そこで五感や理性を超越する仕方でも神を体験するわけである。タワーが好む水溜と泉の比較がなされ、後者が真実で本来で甘美なものとする。またこのことが起こったのは冬のことであったことから、タワーはこの冬が人間の「心が冷えて硬化し、恵みも神も神的な事物も心の内にない」 (*wenne das hertze verkaltet und verhetet ist, das weder gnode noch Got noch goetliche ding in dem hertzen nit ensint.*)<sup>28)</sup> 状態を示し、さらに神に遺棄されている事態を意味するとする。しかしこの遺棄の典型はイエス・キリスト自身にほかならず、「内的外的に自己を放棄して心静かにキリストにならう」 (*volgen in gelossenre gelossenheit von innan und von ussen*)<sup>29)</sup> ことに、真の価値がある。

つぎにタワーはイエスを取り囲んだユダヤ人に触れ、ユダヤ人が語義的に「神を告白する者」 (*der Got begiht*) であることを前提に、その意味するところは、諸能力ごと内面の grunt に向かうことであるとする。もちろんこれが本来の神の友のあり方である。し

28) V, 61.

29) V, 62.

かしそれを中傷し、裁く悪いユダヤ人も存在する。この人々を、イエスは自分の羊ではないと言った。神の友に約束された土地とは何か。それは「栄化された遺産」(verklert erbe) のことであり、それを受け継ぐには自己を捨てるという逆説的行為が必要である。異教徒が依拠する支えをもたず、神の恵みと憐れみに頼っている事実が、信徒の模範でなければならない。

タウラーは最後に、人間は信仰上の修練をやめるべきではないが、その実践そのものを功績であるとする考えを放棄して、むしろ業自体への執着から解放されるべきである。真に重要であるのは、神の憐れみが内面にまで浸透して、人間がその恵みを感謝し、執着を乗り越えて生きることである。

本説教では、grunt の数は比較的少なく、4 回を数えるのみである。(1) は泉に喩えられた自己の魂の grunt であり、(2) も内面の根を意味する自己の魂の grunt を指す。(3) と(4) については、善が根底をなしているということから、必ずしも魂の根底である grunt である必要はないが、どちらにも解釈できるものであろう。

[14] 'Sante Johannes schribet.'

- (1) „Unser here fueffet driger hande lúten. Den einen mit offenbaren schanden, umbe daz er(herr) ime den grunt behalte und in in nochmoles erwerke:...” (065/18)
- (2) „...zuo den edeln menschen, die doch harte gelossen sint in irme grunde!“ (067/03)

この短いテキストは、聖金曜日にヨハネ 11 章 48 と 50 節に基づいて行われた説教（朗読箇所は 45～57 節）である。主旨は、人間の内なるあるものが死なないと人間全体が破滅してしまうということであり、修道女らに対して知的高慢を戒め、徹底した謙遜と神への自己譲渡を説いている。

タウラーは、キリストは三種類の人間を「完全な真理に至る最短の道」(den allernehesten weg zuo der nehesten worheit) に招いているとする。それは、罪が明らかにされた者、真の償いを行う者、神自身により引かれる者である。その上で、福音箇所にある、死なねばならぬ人間とは「我意または自我」(eigenwille oder eigenschaft) であるとして、修練の内容を提示する。これは人間の側の謙遜と自己放棄により可能となるが、この霊的次元は実は神自身が愛と憐れみによって「与えねばならない」(muos geben) のだとする。これはエックハルト的な発想である。

つぎにタウラーは、もしこの自我が死ななければどうなるかを述べる。ローマが来て町を収奪する、すなわち内的高慢が諸能力や魂の諸部分を占めてしまうのである。世間的に尊敬され立派な外観の人々も、そのように転落してしまった。タウラーはここで知性による霊的高慢にも警鐘を鳴らす。彼らは他人に徹底的な自己放棄を求めながら、自分自身が

自己放棄していない。その自己放棄はキリストにならう苦難の忍耐により真に深まるものなのである。

本説教では *grunt* は 2 回使われている。(1) はキリストがその解放状態を保持する、魂の *grunt* を意味する。(2) は徹底した自我の克服が要求される、魂の *grunt* という場が示される。

[15] ‘Clarifica me pater claritate quam habui prius.’

- (1) ....in einer woren vereinigungen mit Gotte innerlichen in dem grunde...“ (068/02)
- (2) ....alle ding werdent in eime ougenblicke ingetragen in den minnenclichen grunt, das als ussgeflossen ist...“ (068/26)
- (3) ....in den grunt wurt diser geist wider in getrungen über alle bilde und formen,...“ (068/38)
- (4) ....sinckent mit einre minnenclicher begerunge in den grunt und tragent Gotte alle ding wider uf,...“ (069/21)

この説教は、主の昇天の祝日前晩に読まれたヨハネ17章1～11節の中から、1節と11節を取り上げて解釈したテキストで、エックハルトに近い思想内容を示している。口頭の祈りから内面的な霊的祈りへの転換、祈りおよび礼拝とその主体との一致の重要性を説いている。

タウラーはまず「父よ、あなたの子に栄光を与えてください」というイエスの祈りは、五感や心底のすべてを挙げて、キリストの内に、キリストと共に、キリストによって祈ることを意味していると述べる。この祈りは、聖アウグスティヌスと聖アンセルムスが認めた、「神の内への心底の上昇」(ufgang des gemuetes in Got) といえる。それには、自己の自然本性的諸能力の放棄、五感と認識力の超越が必要で、全修練を乗り越えねばならない。そうして内面の *grunt* で神と一致することである。それは「創造された(人間の)霊が創造されぬ神の霊のうちに沈んで、融解する」(dis geschaffene geist versincken und versmeltzen in dem ungeschaffenen geiste Gottes)<sup>30)</sup> ことを意味する。タウラーでは一般に、こう表現するとしても、被造物と神との存在論的区別がエックハルト以上に明確になされていることを念頭におかねばならない。

さてタウラーも、ニュッサのグレゴリオスが『モーセの生涯』(De vita Moysis) で述べたように、被造物への執着を断念して「心底を高めへと導く」(gemuete uf in die hoehe triben) べきであると述べる。この説教では *grunt* とほぼ同意義の *gemuet* が使用

---

30) V. 68.

されている。全被造物は神から流出して創造されているので、それは無執着を前提として神へと還流すべきものである。自己の grunt において自己と被造物の徹底否定により、神と一致すること、それこそが真の霊的祈りでなければならない。

本説教では、(1)は神との一致の場をあらわす魂の grunt を示している。(2)は、全被造物の流出と創造の根源たる神という grunt である。(3)は、霊がすべての像と形式を突破して達すべき次元としての魂の grunt である。(4)の grunt は、魂の grunt であると解すべきであろう。

(以下、続く)